

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

イカレタ男は愛を知らない

【作者名】

Yuusha S

【あらすじ】

少年は狂っていた。

小学生の頃、公園に血まみれのイタチの死体があった。

気色悪かった。怖かった。

中学生の頃、いじめられた、俺を5人以上で囲んで蹴ってきた、やめてと10回以上も言ってもやめてくれなかった。家に帰って何度も泣いた。不登校になりかけた。友人のおかげで耐えられた。

ある日、内蔵の見える鳥の死体を見つけた。可愛そうだったので、埋めてあげた。

あいつらのもこんなのかな？

高校生、いじめられなかった。この頃から俺の目は死んでひん曲がった、みんな俺の目を気味悪がって避けてる、俺も近寄らない、いつも一人、幸せ

道路の上でタイヤで腹を潰されたのか口から腸を吐き出した猫の死体を見つけた。興味がわいたから埋めてあげようと近づいた時、偶然、車を通った。

「ベキィー！」

猫の死体が潰された。その音、潰された猫を見て少年の口は笑っていた。

学校帰りに、腹を裂いて臓物を全てぶちまけている、狸の死体を見つけた。

(ラッキー、良いことを思いついた！この死体を信号にぶら下げたら、みんなどんな反応をするだろう、これを先生の教卓の中に入れたらみんなどんな反応をするだろう)

そんなことを考えながら少年は笑っていた。

ある日、偶然ニュースにこんなのがあった。

幼児をバラバラに殺しその死体を保育園の校門に捨てたニュースだ。

犯人は最初、小さな動物の死体に興味がわいて次第にエスカレートしたそうだ。

これと驚くぐらい少年と犯人は共通点があった。

少年は自分に恐怖した。自分も次第に人を殺すようになるのかとそうなれば…

自分は犯人とは違うと、思い続けた。

次第にエスカレートしていく愛を知らない少年の狂った物語をど
うぞ味わってご堪能くださいませ。

あまり期待はしないでください、処女作なんで

つけ

神の空間にて…

色も物も何のない場所に目が死んでひん曲がっている少年がぼつんと一人立っていた。

(ここは何処だ、真っ白だ)

(いつ俺はこの場所に来た？俺以外何もない、何処だここ)

(俺は確か深夜ゲームしてる途中に気絶したんだ、その後何があったんだ)

(まさか…)

(誘拐されたのか！)

(誰に？俺はこの人生、動物か死者にしか恨みや喧嘩を売ってないはずだ。)

(じゃあ誰に)

「誰に？とぼけんじゃねえよ、俺にだよ、お前が俺の墓にシヨンベンかけたの忘れたか」

俺の後ろから声が聞こえた。

振り返るとそこには、漫画のように顔を真っ赤に染めた中年の男性がいた。

何やら怒っているうだ。

「申し訳ありません、どちら様でしょうか、人違いではございませんか？」

「これ以上怒らせないために腰を低くして対応する。」

「はあ…何言ってるんだお前は…とぼけてんじゃねえよ!!」

中年の男性はそう言いながら近づいて俺の胸ぐらを掴み上げ、腕を最大まで引き、俺の右頬を殴った。

「ううー」

口と歯に激痛が走る。どうやら今ので犬歯が折れたようだ。ジンジンするだけで思ったより痛くない
「わからねんだっ たら教えてやるよ…」

お前は！お前は！！お前は!!!俺の墓にシヨンベンをかけて、その上、唾を吐き捨てやがった。場所は香川県の高松市…思い出したろ…」

何言ってるんだコイツ…頭大丈夫か？

いや、あつたな
確かにしたことがある

今年の10月に…ダメなこととはわかっていたが、俺はどうしても幽霊は本当にいるのかどうか知りたくて好奇心で墓にシヨンベンをかけたことがあった。

そんなことを考え黙っていると
「おい！なんか言ったらどうだ！」
黙っているのが気に食わなかったのか
こんどは左の頬を殴ってきた。胸ぐらを掴まれているので、手で防御できない

「ガァー！」
運がいい、今度は歯が折れなかった。最近運がいいな

この程度の痛み、まだ耐えられる。
でもこれ以上はやばい、いつもの癖が出ないことを祈る、自分が怒り狂わないことを祈る

「申し訳ありません、申し訳ありません、申し訳ありません、お許し下さい」

必死さを最大限に表現しながら許しを請う

でも俺は謝りながらこんなことを思っていた

(たまんねえなホント、清々しい、気持ちいい、この絶望感がたまらない)

「なんで！なんで!!お前、笑ってんだよ、イカれてんじゃないか？、気色悪い」

まただ…まただ…どうしてだ、どうして俺は殴られて笑ってんだ
……………Mじゃないと思うんだが

俺は昔からあまりに辛い出来事にあうと微笑を浮かべる癖があった。どうしても口の端が釣り上がるのだ。何故だろう16歳になってもわからない

「そつだ、良いこと思いついた。このまま殺すのは、つまんねえ」

「お前にイカレタ奴にぴったりな世界があるんだ、ちよつどそこに――つだけ空気があってな?どうだ喜べー」

「俺が転生させてやるよ絶望しかない世界に、お前みたいなやつにはぴったりな、ドロのよつな世界だ」

「そこでもお前は笑っていられるか?せいぜい泣き喚いて俺の許しても請いてろ」

そこで俺は殴られたわけでもないのに気絶した。

目を覚ますと灰色の空が見えた。アスファルトの上で寝ていたのか体中が少し痛い、起き上がり辺りを見回す。

「今度はなんだ…」

そこは日本の様なところだった。目を横に向けると、建物にかすれた字で日本語が書いてあったから、直ぐに分かった。

だが…街はまるで大震災の次の日のような有様である。店のほとんどが半壊していて、まともに営業している店なんて無いだろう。誰も住んでないのは一目瞭然、一体何があったんだ

俺はここは日本じゃない、すぐにそう思ったかった。俺の生きている世界は、もっと綺麗で美しいはずなのに、こんなのは夢だと思った。こういうことを現実逃避というのだろうか

でも、そんな俺に埃っぽい風が頬を撫でて鼻についた。

そのせいで現実だと実感した。くやしいが認めざる負えない…現実だ。

でも大丈夫だ、心配ない、ここは日本なんだから

とりあえず、とっとと人でも見つけて、こここの場所聞いて電車に乗って、家まで帰ればいい、金はATMへ行けば引き出せる。何の問題もない

そうして俺は人を探すために歩き出した。

俺はこの時まだ気付いていなかった。そこらじゅうに転がっている人であった物…白骨死体に

そして、この世界がブラック・ブレットの世界で

その上ガストレアがウヨウヨいる場所であることに
俺はそのことを数時間後に死ぬほど後悔することになる。

俺は中年の男が言っていた絶望しかない世界、の現状を知ること
なつた。

恐怖、興奮

「あゝ誰もいねえ〜ついてねえ〜」

歩き出してからのどのくらいだろう？

5時間？6時間？

足も痺れて体が重くなってきた。

こんなに歩いてても人っ子一人見つからない、やっぱりここで何かがあったのだろう

Tウィルスでも撒かれたんだろうか（笑）

さらに2時間後…

太陽が沈み、夜になり辺りが暗くなることで気付くことがあった。

自分が7、8時間程度歩いていた方向と逆の方向から人工の光が見えたからだ。

それは、つまり人が電気を使っている証拠である。

随分とその光は乏しいが間違い無いと思う

でも凄いショックだ。これで俺の7、8時間がパーになった。

「くっそーもっ、へとへとだったのについてねえな〜」

当然、目を覚ましてから何も口に入れて無い、そのせいで喉が渇いて腹が減った。

辺りを見回すと運が良いことに偶然コンビニが見えた。

そこで食料を調達しよう

「どうせ何も無いと思うが、コンビニでも行ってみるか」

「そりゃあるわけ無いよな」

やはり無かった。

薄々気づいてはいた。

ここに人が住んでいたのは数年前、最低でも1年は住んでないと考えられる。

理由は、すべての家や店の老朽化で壁がひび割れていたからだ

これだと、どこを探しても食料や水は無いだろう

あつてもとつくに腐っているだろう

ということ是非常にやばい

餓死する可能性が出てきた。

だが不思議と俺の体からは冷や汗は出なかった。

不思議と落ち着いている。

とりあえず今日はコンビニで寝るとしよう。

どうせ誰も住んでないし人の家で寝るのも良いのだが、他人のベッドで寝るのはなんだか気が引けたからだ。

気分的に嫌だ。

そんなこと気にしてる場合かと思っただが、俺は床で寝るのは慣れてるので正直どこで寝ようが俺にとっては関係ない。

手でゴミや砂を払い

頭に手を組んで枕がわりにし

「明日こそは…」と心の中で唱えながら目を瞑った。

瞬間である

「ドーン…」

と、いきなり外で大きな物音がした。

俺は突然の出来事に飛び起きた。

(なんだ！)

急いでコンビニの外を見た。

そして思はず我が目を疑った。

「なるほどお、これが絶望か…あの中年の男が言っていた意味はこれか」

そこには蜘蛛の形をした巨大な生き物がいた…暗いせいでボヤけて見えるが間違いない

さっきの物音はこの巨大蜘蛛が飛び降りたせいで起きたんだろっ、証拠に巨大蜘蛛の足跡が凹んでひび割れている。体重は軽く1tは超えているだろう

突然の出来事に心臓がバクンバクンと振動する。殺される怖さからくるものだろうか、興奮からくるものだろうか、恐らく興奮だろう、俺の口は今までで一番つり上がっていた。

釣り上がりすぎて三日月型になっている。もはや微笑とは言えないだろう

巨大蜘蛛が軽く辺りを見回した、俺は急いで頭を引っ込め、商品棚を背に身を隠した。

興奮した心臓を落ち着かせ息を荒くして焦りながら考える。

(と、とりあえずあいつが過ぎ去ったら急いでトイレに隠れよう今日は便座で寝ればいい、そのほうが安全だ)

隠れていれば見つからない、俺はそう確信していた。現にあの巨大蜘蛛の足音は次第に離れていく

その慢心が悲劇を呼んだ。

(ふー…助かつ！)

安心したせいか、つい、背に体重を乗せてしまった。

商品が何も無い商品棚はステンレスの柵の様な物
そんなのに体重を乗せてしまえば当然…

「ガシャン」

倒れるに決まってる

当然、巨大蜘蛛はこちらを見た、俺を見た

「オワタ…」

螳螂の斧（無謀な勝負）

巨大蜘蛛がこちらを見た。

その瞬間、頭が真っ白になった。

「ひひ」

でも俺は不思議と笑ってる。

死を目の前にしたせいなのだろうか

俺の体は震えもしないし

すごく冷静だ。

さて冷静な頭で1秒で決めよう、それ以上の時間は死しかないだろう

偏差値40点の頭で必死に考えた。

結果、俺は1秒で3つの選択肢を絞り出すことができた。

全力で逃走

立ち向かう

隠れる

頭の悪い俺には上々の考えの方だと思う。

可能性としては

まず、

当然、相手の方が俺の移動速度より速いだろう、だが障害物を盾にしながら逃げれば、可能性は0じゃないかも？

次に、

いや無理、不可能、可能性無い、なんで俺はこんなのを選択肢に選んだんだらう謎だ。

次に、

気づかれた状態で隠れるのは不可能に近い、それにここらへんは、ビルばかりの地形だ隠れている場所の近くを荒らされたりしたら俺はビルの瓦礫に押しつぶされて即死だらう

と、これのどちらかしかない…

俺は にした…

既に巨大蜘蛛はかなりのスピードでこちらに向かって来ていた。

俺は追いつかれるより前にすぐコンビニを出て

ビルとビルの間細道に全力で逃げ込んだ。

これで少し巨大蜘蛛と俺の距離は開いただらう

このまま細道を抜けて、回り込まれるより前に新たな細道へ入れば、また距離を離せるはずだ！

俺はそう思いながら細道を抜けた瞬間

視界を遮られた。

降ってきた物によって

形は蜘蛛…

「なんで！チッ!!!なんでだ！」

予想と違う！

てっきり回り込んでくるか

ペタペタとビルを上がって来るかと思った！

そんな、まさか…「冗談だろ！」

「飛び越えたとかじゃ無いだろうな！」

いや、それしかないだろう、それ以外ありえない
ビルはおおよそ50、60mぐらいあったはずだ。
それを飛び越えるってことは

俺の予想の5倍以上身軽ってことか…

こんなことなら 選択肢にすればよかった。

そしたらまだ希望はあったかもしれない

逃げ切るなんて考え方が甘かった…

これで逃げ切る可能性は0、不可能だ…

俺は………自分の運命を決める選択肢を間違えた。

もう生き残れる可能性など微塵も無い、俺の未来は 選択した時
点で終わってたのか………

はあ~~~~~…

も…いっ

もういい！

もういい！！

もういい!!!

「もういい!!!」

「知るか！」

「何が選択肢だ！」

「こんなん有っても無くても死んでんだろおーが！」

「なに未来に希望、持ってたんだ！」

「希望なんて持てるような人間じゃ、ねえーだろ俺は！」

「俺はただ！」

「死に物狂いで！」

「血反吐、吐いて！」

「生に縋るだけだろ！」

もう選択肢なんていらん

立ち向かってやる

生きて、あの野郎（中年の男）を見下してやる！

叫び終わった直後、奴はこっちに飛びかかってきた。

相変わらずの巨体である、近くで見るとより大きく強く見えた。

足がすくむ、腰を引きそうになる

ここにきて初めてこの巨大蜘蛛に恐怖した。

これが捕食される側の、恐怖なのだろうか

それでもまだ、俺の底の方までは、怯えてない

俺はとっさの判断で、なるべく距離が出るように力の限り前へ前転した。

勢い余って2回転してしまったがギリギリやつの腹を潜ることに成功した。

あまりの恐怖に心臓はバクバク振動している

すぐに立ち上がり全力で前へ前へ走る。

後ろを振り向くと…

奴はまるで標準を合わせるようにこちらを向いて口を開けていた。走りながら背中に悪寒が走る

おそらく奴は狙いを定めて口から何かを射出しようとしている。

射出されてから動いては、間に合わない、その前に行動しなければやつの様子を走りながら観察すると

巨大蜘蛛の膨らんだ腹が少し脈打つ様に動いているのに気づいた。

急いで方向を横へ変えて当たらないよう祈りながら全力で走る

俺が方向を変えてすぐ口から白い液体を射出した。

(間に合うか…)

だが

俺は少し気がつくのが遅かった。

俺の左足に巨大蜘蛛が口から吐き出した白い液体が付着した。

俺がいくら足を動かそうとしても地面にくっついてびくともしな
い

最悪である

「嘘だろ!!!」

そこら辺にいる蜘蛛の糸の比じゃない

まるでコンクリートで足を固定された気分である

万事休す

これを解く手などあるはずがない

焦り必死で蜘蛛の糸を引き剥がそうとする俺に巨大蜘蛛は飛びかかってきた。

いや…万事休すじゃない

まだ、ある

まだ…

巨大蜘蛛の口が俺に迫る

直ぐに俺は、固定されている左足の方向へなるべく体を寄せる
そして、俺の体を喰らいに来る巨大蜘蛛の口が間近に迫った時
右へ飛んだ。

俺の作戦はこうである

巨大蜘蛛が飛びかかって俺を喰らおうとするのを利用して喰われる寸前まで近づかせて巨大蜘蛛の口を右に躲し、勢いの付いた巨大蜘蛛の体を、俺の体に体当りさせて

俺の吹き飛ばされる勢いで左足の蜘蛛の糸を引き剥がすというも
のだった。

だが、現実が違う、そんなのうまく行くわけがない

「っがぁぁぁかっあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

当然…喰われる

才能発揮、ずば抜けた回避能力

現実には、神は残酷である。

どんなに未来へ希望を持っても

どんなに明日を願っても

どんなに辛く苦しくても

現実には、神はゴミの様に見捨てる

それが現実、それが神の選択、救済など夢物語

だから俺は現実や神に希望を持ったことは、数えるくらいしかない
皆に聞きたい、神社や仏や神に願って救われたことは

1度でもあったか？

俺は無い、俺はそういう人間だ

なのにどうやって信用すればいい

だから俺には宗教なんて信用できない

いつも軽蔑している。

嫌、もしかすると、神や人を信用できない俺には当然の報いなのか

もしれない

でも俺からすれば信用なんてギャンブルや賭けの様なものだ。

俺はそのくらい神や人を信用できない

「っがあああかつあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ」

ガスバーナーで傷口をあぶられるような痛みが走る。
失敗して左肩の付け根から巨大蜘蛛に喰われた。
肩からゴツソリまるごと無い
こんなに痛いなら、いつそ頭を喰われて死んでおけばよかった。
でも痛いということは、生きている証拠だ。

俺は巨大蜘蛛に喰われ、ぶつかつた勢いで、コンクリートの壁に叩きつけられた。

ついでに左足の白い液体も取れていた。
コンクリートに叩きつけられた痛みは感じない
それよりも肩の痛みが尋常じゃない

俺を仕留め損なつた巨大蜘蛛はすぐにその巨体をこちらに向けた。
痛がつて、泣き叫んでいた体に喝を入れる
すぐに動かないと今度こそ喰われる。

足を子鹿のようにビクビクさせながら立ち上がった。
でも俺の顔は不思議と、巨大蜘蛛に見つかった時からずっと笑つた
ままだ。

巨大蜘蛛が飛びかかってくるのに身構えていると
自身の体の異常に気がついた。

(あれ? 痛くない、肩が痛くない、え? なんで、嘘だろ! なんで付け根
からまるごと食われてなのに痛くないんだ)

当然、知っているはずがない
ガストレアなんて生物は元いた世界には存在しないのだから
俺がさつき巨大蜘蛛に噛まれてガストレアウイルスに感染して

体の痛覚が麻痺していることなんて

知っているはずがないのである

そしてガストレアウィルスに感染すると約1時間でガストレアに変貌する事実も俺は知らなかった。

俺の死が確定していることも

巨大蜘蛛は6本の足を少し折ると、すぐ飛びかかってきた。

やはり、1度見ても怖い、足がカタカタと震える。

それでも、さっきと同じように飛んでくる蜘蛛の腹を全力で前転して潜る

巨大蜘蛛がこちらに振り返る僅かな時間で後ろを走り抜ける。

そしてビルとビルの細い隙間に入り込んだ

巨大蜘蛛は振り返るのにわずかとは言えない時間をかけることに気がついた。

巨大蜘蛛が飛ぶ瞬間が回避のチャンスということも

これで生存確率は大きく上がった

このままビルの隙間を進んでも抜けたら回り込まれるのをわかっているが、作戦があるのでビルを抜ける。

「ドーン」

やはり巨大蜘蛛はビルを飛び越え回り込んできた。

僅かに地面が振動する。

ここが重要

着地の瞬間、巨大蜘蛛に僅かな隙ができるのに俺は賭けた。

この僅かな隙に巨大蜘蛛の口から射出される白い液体を遮ることができる障害物を見つける

巨大蜘蛛の15m向こうに赤いポストを見つけることができた。

「あれでいいか…」

地面の振動など気にもかけず巨大蜘蛛の体の下を走る。

膨らんだ腹の下を抜ける

俺の予想では今頃、巨大蜘蛛はこちらに体を向け、口から白い液体を射出しようとしてくるはずだ。

俺は自分の予測を信じ、振り返らず全力で走り、赤いポストへ滑り込んだ。

狙いどおり、赤いポストに巨大蜘蛛の射出した白い液体がかかった。

赤いポストに白い液体が、かかったのを確認して

すぐさま全力で反対側のビルと店の隙間に入る。

「ゴッ…」

瞬間、後ろで俺に飛びかかってきていた巨大蜘蛛とビルの激突音がした。

ギリギリ助かったようだ。あと少し遅ければ、今頃、口の中だろう

そう思うと、ブルリと背筋が震える、それと同時に心臓が強く高鳴った。

死の恐怖が興奮へと変わっていた。

今度もまた同じ方法でこのビルと店の隙間を出てさっきのように障害物を探し、それを盾にして隙を見て走ればいける！逃げ切れる！俺はそう考えていた。

走りながらビルと店の隙間を出る

すると、すぐに巨大蜘蛛が大きな振動を立てて地面に着地した。

そして僅かな隙ができる。

すぐにちようどいい障害物を見つけた。

今度は枯れた大きな木にすることにした。

また巨大蜘蛛の体の下に向かって走り出す。

途端に！

体が不意に重たくなった。

そして巨大蜘蛛の足元で大きく転んだ。

「ッ……ッ！」

手で受身を取ろうとしたが、左手がないので倒れる体を支えられず肩のない左に転んでしまった。

その拍子に抉れた左肩を強く地面に打ち付けたが痛覚が麻痺するのでまったく痛くなかった。

「じょ……じ……冗談……じゃない」

いくら足に力を入れてもびくともしない

足だけでなく顎や舌まで動きづらくなっていた。

体が重いなんてレベルじゃないこれは固まったと言っている。

俺は気がついていなかった。

これがガストレアウイルスの症状だということ

「じ……んな……もの……」

どれだけ踏ん張っても体は動かなかった。

顔を前に向けると巨大蜘蛛が、こちらをまっすぐ見ていた。

巨大蜘蛛は確実に後2秒以内に喰ってくるだろう、そう直感した。

でも、死に恐怖は感じなかった。
むしろ興奮した。

だって俺は諦めていなかった。
俺の体で唯一動く場所がまだあった。
それは首から上と右の指先だ。
そこですら動かし辛い

まだ、足掻ける、死のダンスを踊れる。

指に渾身の力を入れて地面を押す
俺は運良く寝返りを打つことができた。
もう一度押す

さらに寝返りを打つことができた。
これは相当運がいい

俺が微妙に自分の位置を変えた理由は
巨大蜘蛛の目は口の辺りが大きいので見えないうろくなっている
からだ。

だから、口の下で少しでも動けば
巨大蜘蛛の喰らう位置から逃れることができるのではないか？
俺はそう考えた。

運の良いことだ...

「ねえパパ、どうして助けるの？」

幼い女の子の声でした。

「それはね小比奈、我々と同じ人種だからさ」

仮面の男の表情は見えない